



開講式・第1回入学式行われる

留学生を含む19人の入学者を迎えて、10月2日（火）18時30分から東大まちづくり大学院の開講式・第1回入学式が工学部14号館141番教室で行われた。開講の辞で、松本洋一郎工学系研究科長は、「難関となった入学試験を突破されて入学され、おめでとうございます。この大学院修士課程には、すでに相当な地位を占めている方から新進気鋭の方まで幅広い社会人が集まりました。皆さんの参加によって東京大学に新しい研究コミュニティが形成されることを楽しみにしています」と入学者を歓迎した。続いて、社会人大学院を協力して支えることになる3専攻の専攻長から歓迎と期待の言葉が述べられた。社会基盤学専攻の清水英範専攻長は、「皆さんが修士論文の研究を行う際には社会基盤学専攻の先生の下で研究することもできます。東大にはまちづくりという分野でも多くの先生がいらっしゃるの、いろいろな観点から勉強できる、という利点を生かして有意義な学生生活を送ってください」と述べた。

建築学専攻の難波和彦専攻長は、「私も大学に戻るまで長く設計事務所にいたので、皆さんとは同士という意識があります。建築の学生にも都市への関心が強い人が多いです。建築学専攻としても、強力なメンバーで皆さんと一緒に勉強できるようにしたいと思っています」と述べた。

最後にこの新大学院が設置されている都市工学専攻の原

田昇専攻長が、「研究科長をはじめとする工学系研究科の方々のご支援でこの大学院が発足できたことを感謝します。

皆さんを迎えて、私たちとしてもこれまでの研究がどれほど社会に有用かを議論できることを楽しみにしています。また、社会人として多くの経験をお持ちですが、大学院に入ったので、初心に返って勉強するという姿勢もぜひ持ってください」と締めくくった。その後、列席した先生方、及び事務職員の紹介が行われた。式終了後、早速第1回目の講義として滝沢智教授による「都市と環境」が開講した。



■入学式で祝辞を述べる松本洋一郎工学系研究科長

開講挨拶

東大まちづくり大学院の開講にあたって

「東大まちづくり大学院」コース長 大西 隆



東京大学では、社会人を対象とした初めての大学院修士コースとして「東大まちづくり大学院」（正式名称は東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻に置かれた都市持続再生学コース）を開講しました。従来から、都市工学専攻には都市計画と都市環境

工学の2分野があり、さらに社会基盤学専攻と建築学専攻でも都市に関連した研究を行うことができましたが、この大学院では、社会人がもつ実践的な問題意識に応えるべく、全く新しいカリキュラムを組み、これらの専攻の協力の下でまちづくりに関わる教育と研究を進めようと考えています。学生は、就業と両立するよう夜間と土曜日に行われる講義と演習から必要な科目を受講できます。また、3専攻に属する教員の指導により修士論文のための研究を行います。講義においては、学内の教員に加え、新たに実務経験豊かな教員が参加しています。さらに、多様な分野で活躍する外部講師による講義を交えてまちづくりの最先端の理

論と実践を理解できるように工夫しています。修士論文研究では、学生全員が社会人であることから、実務を通して関わっているであろう、まちづくりのさまざまな動きに関連する理論や先行研究を十分に学び、実践的な課題を深く掘り下げて考察するという実証的なスタイルを重視します。

去る6月に行われた入学試験で、12人の募集に対して6倍の応募者があり、受け入れ定員を18人に増員し、この分野の学習に関するニーズの高さを改めて知りました。

東大まちづくり大学院の開講は、日本のまちづくりに関する先端研究の第1歩です。この新コースが、現場に学び、現場に有用な知を蓄積するという役割を担い、十分に機能していくものと信じます。

周知のように、今後、都市問題はアジアの都市化急進地域において深刻さを増して行きます。アジア諸都市との共同学習と研究に視野を向けることは、とても重要です。東大まちづくり大学院では、今年すでに韓国の土地公社からの留学生を迎えました。これからもアジアを中心に国際的な視点をもった講義・研究を発展させて国際的な学術交流を進めます。

最後に、東大まちづくり大学院の発足に際して、小宮山宏総長と松本洋一郎工学系研究科長をはじめとする学内諸先生のご支援とご指導、ならびに寄付講座にご協力くださった企業の皆さまに改めてお礼を申し上げます。

新任教員の紹介と抱負

■明石達生教授



ゴジラの身長が平成になって伸びたのを知っていますか？ ぼくは特に怪獣オタクではないのですが、特定の世代の男の子であった関係と、仕事で関わった大規模開発を律儀に必ず破壊しにやってくる関係で、ゴジラがどうも気になります。それで本題ですが、昔は子供が誰でも知っていたとおり、ゴジラの体長はかつて50mでした。ゴジラが転べばビルが壊れたのは、当時は建築基準法の絶対高さ制限で最高31mに抑えられていたからでした。でも、平成に至り、舞台は新宿副都心。戦時中南海の島で米軍に追い詰められたところを1頭の恐竜(放射能で変異する前のゴジラ)に助けられた経験を持つ大企業の社長が、東京都の土地信託による新宿モノリスビルの高層階の自室に避難命令を無視して居残り、ゴジラと見つめ合う。ゴジラが涙したかと思った瞬間、手を振り回してパーンとモノリス(高さ123m)を破壊する。そのためにタイムマシンで原潜の爆発に遭遇するという無理をして、ゴジラの体長は100mに変更されました。でも、戦前の1933年、既に摩天楼のNY市ではキングコングの体長がわずか7m。女の子を手を持って摩天楼を上る展開でした。すごいでしょ、この違い。こんな話に平気で付き合える方、声を掛けてくださいませ。

■石川幹子教授



都市における緑地環境計画について、計画、政策のみならず、具体的なまちづくり活動、設計を通し、実践的活動を行っている。

研究としては、近代化に伴う社会的共通資本としての緑地形成の歴史的経緯を、世界各国における事例研究を通して明らかにした。これを踏まえて、地球環境時代の緑地環境計画論として、生命の根源である水循環を基礎とする、流域圏プランニングの方法論の構築、展開を行っている。これらの基礎的研究の実証活動として、市民参加による水と緑のまちづくり活動を行っている。主な対象地としては、岐阜県各務原市、横浜市、鎌倉市、川崎市などである。国際的活動としては、マドリッドにおける「21世紀の水の公園」の設計(EU環境基金による国際公園競技設計1位)、中国瀋陽市ハン河公園計画(国際公園競技設計1位)、ロシア・バシュコルトスタン共和国建国45周年記念公園の設計などがある。

主な著書：「都市と緑地」(岩波書店)、「流域圏プランニングの時代」(技法堂)、「21世紀の都市を考える」(東京大学出版会)など。主な作品：「中国瀋陽市ハン河ランドスケープ設計」(2007年)、「瞑想の森」(2006年)、「各務野自然遺産の森」(2005年)、「新宿御苑の森の再生」(1990年)、武蔵野中央公園(1988年)、臨海副都心センタープロムナード設計他、多数。

技術士(都市及び地方計画)、日本学術会議会員

■遠藤薫教授



6月から先端研に赴任いたしました遠藤です。どうぞよろしくお願ひいたします。

それまでの24年間、都市再生機構(入社当時は住宅・都市整備公団)において、もっぱら市街地再開発事業などを中心とした都市再開発を担当して参りました。とはいうものの、まちの再開発などというものは、一人の担当者の方で、担当する期間内に出来あがるようなものではありません。まちづくりの一場面を、地元の方々をはじめとして多くの人々とともに担当し、いっしょに悩んできたというのが正確な言い方でしょう。中には答えを見出せないまま、いたずらに時間が過ぎていったもの、事業環境の乱高下に翻弄されて、為す術もなかったようなものもあります。決して、こうすれば都市は再生できる、というような確信を持って今の職にあるわけではありませんが、当まちづくり大学院では、これまでのまちづくりの現場の経験を生かして、気鋭の院生の皆さんと貴重な時間を共有していきたいと思っております。

■多田宏行客員教授



1971年に東京大学法学部を卒業し、三井不動産(株)に入社以来36年、今年の9月末に定年を迎えたところです。直前の15年間は、三井不動産S&E総合研究所に席を置き、街づくりの研究・コンサルタント業務に従事しておりました。街づくりとの出会いは、入社6年目に、街並み形成型戸建住宅事業を担当したのが始まりです。以降、面開発型の複合共同住宅事業（大規模マンション事業）、住宅販売営業、都心型商業施設開発事業等を担当しました。街づくりにおいては、夢や理想を追求する理念と、事業継続性の条件としての事業採算見通しという現実感覚の両者が、車の両輪のように不可欠だということを痛感してまいりました。日本中で、誰も訪れる人がいなくなった集客施設や、誰もが求めていなかったかもしれない共同誤謬の理想の産物を造り過ぎたように思います。

他方において世界第二の経済大国でありながら、魅力的な街が少なすぎるという国民的な課題もあります。この課題の解決をライフワークと考えております。産官学連携の時代に、事業採算と事業性を越えた価値が共生する魅力的な街づくりという重大テーマを、皆さんと共有しながら、都市再生・地域再生を考えていきたいと思っております。

■松行美帆子客員准教授



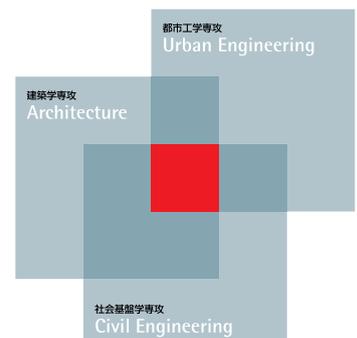
専門はアジア諸国の都市計画と都市環境計画です。アジアの都市計画ではとくにタイをフィールドとしており、学生時代はタイのチュラロンコン大学に留学していました。最近は、とくに戦略的環境アセスメントに関する研究に力を入れており、英国やオランダの土地利用計画への戦略的環境アセスメント制度及び運用実態についての研究を行っています。同時に、アジア諸国の都市計画への戦略的環境アセスメントの導入についての研究も行っています。

2月に東大に着任してから、まちづくり大学院の立ち上げに参加してきました。当初、初の社会人大学院と言うことで、入学希望者が集まるのか夜も眠れない(?)日々を送っていましたが、蓋を開けてみると当初12名の定員に72名の出願者があり、驚くとともにまちづくり大学院の意義の大きさを実感しました。まちづくり大学院が始まって2ヶ月が経ちますが、19名の学生さん達はどなたもこの道のエキスパートであり、エネルギッシュな学生さんから学ぶことの多い日々です。まちづくり大学院も試行錯誤を繰り返しながら進化していきますが、私も、まちづくり大学院を通じて学生さんとともに日々進化していきたいと思っています。

「先生、よろしくお願ひします！」



■2007年度入学のみなさん



まちづくり大学院に入学して——1

初年度入学のみなさんに、志望した動機や今後の抱負など、思い思いに語っていただきました。

■飯塚浩一郎——UR都市再生機構

これまでの仕事では、ある区画、ある土地について、時間的に空間的に如何に効率的な利用を行うかという観点で、プロジェクトを考えることが多かった。しかし、今後は都市再生という観点から、ある区画の単に効率的な事業化だけではなく、そのプロジェクトを活用した地域活性化など地域に貢献する市街地整備のソリューションを提供することが、求められるようになるだろう。大学院では、そのソリューションを提案する相手である都市に関わる主体や彼らをもつ価値観などの多様性の理解を深める一方、ソリューションをまとめていくための考え方や手法を学び、今後関わるプロジェクトにおいて、そのプロジェクトが地域の中で果たす役割を踏まえた提案をしていきたい。

■川崎泰之——大成建設(株)

大学では建築を学びましたが、都市デザインや景観に関心があり、会社では面開発のマスタープラン作成やランドスケープデザインなど、計画や設計を中心に実務を行ってきました。こうした経歴から、建築やランドスケープに関しては一定の知識と経験を得ていますが、都市計画に関する知識はまだ十分ではないと考えていました。また、都市計画制度や景観法、市民参加手法など最新の動向を学ぶ必要性も感じていました。

また、地元川崎市高津区において区民と行政のパートナーシップのまちづくり推進組織である「まちづくり協議会」に区民として参加し、都市計画マスタープランの区民提案を策定しました。その際、まちづくりの課題の難しさや自分の都市計画分野における知識の少なさを痛感しました。

3月に行われたシンポジウムや5月の説明会に参加して、まちづくり大学院の設立趣旨やカリキュラム内容の説明を伺い、本コースにおいて、都市計画全般の基礎的知識および実務に役立つ実践的知識を、体系的に学習することができるとよい機会と考え応募に至りました。

■川原智彦——(株)INA 新建築研究所

これまで都市計画(まちづくり)に学生、行政職員、企業人、一市民として関わってきた。と同時に、多くの方々と接する経験から、相手の立場や考えを理解・把握する【他者を感じる力】を身につけることとなった。このたび、東大まちづくり大学院での「学びなおし」は、まちづくりにおける【本質を捉える知】を養うことを目指している。今後私は、市民のよりよい生活に向け、【先頭に立つ勇氣】を持った専門家として、既成概念や制約、制度にとらわれることなく、まちづくり政策立案・提案・実践を高い質を持って進めていきたい。これらを通じ、まちづくりに関わる専門家のプレゼンス確立と将来の人材育成に微力ながら寄与していくことが職業人としての後半を迎える私の務めだと考えている。

※【 】は、TVにて小宮山総長が学生に授けた3つの言葉を引用

■熊沢祥太——三菱地所(株)

一ヶ月間が過ぎたが、率直な感想としては、経験豊富でバックグラウンドが多岐に渡る社会人の方々が集まられていることで、講義に幅が出ていると思ったことである。講義終わりの質問一つに至っても専門性の高い、あるいは色々な切り口からの質問が出ることも多く、大変参考になる。今までの一ヶ月間は広く浅く、ある種教養に近いことを学んでいると思うが、自分の学生時代に比べ、向学心も増しており、講義で得られるものも大きくなっていると感じている。

仕事をしながらの通学は時間的・精神的な負担も大きく、大変ではあるが、刺激的な毎日を過ごすことが出来ている。今後、益々講義のレベルも高くなることと思うが、折角の貴重な機会であるので、自らの糧となるよう、一日一日を十分に生かし、有意義にしていきたいと考えている。



■演習での作業



■ 演習での発表

■ 肥沼位昌——所沢市役所

所沢市役所では出納室や財政課で仕事をし、地方交付税の仕事などは、国と自治体の財政関係がみえてきたりして面白いものでした。その後、環境総務課に異動して市民と接する機会も増えるとともに、温暖化対策ということで市民のマイカー利用を減らすという課題に取り組んでいます。また、所沢の中心市街地活性化の拠点施設である井筒屋町造商店の活動にボランティアとして携わったりもしています。所沢は無秩序なスプロール化に襲われ、今日でも街並みや道路には様々な問題を抱えており、個人的には、その要因として都市計画や土地税制の影響が大きいと思っています。さらに、今の所沢は高層マンションが次々と建ちつつ人口は増えつつも、中心市街地は活性化からはほど遠い状況です。こうした現状に対し、高層マンション在住の市民と地域の市民とが結びつくことが必要だと思っていますし、公共交通を便利にして市民がマイカーに頼らずとも暮らすことができ、緑が身近に感じられるまちづくりを進めることが重要だと思っています。そのためにはどうしたらいいのか、まちづくり大学院で自分なりの解答を見つけないか、こうした問題意識が入学のきっかけとなりました。

■ 鈴木智之——横浜市役所

私は、市役所に入庁して道路や都市計画、都市開発行政にかかれこれ25年携わってきました。

昨年4月、8年ぶりに都市計画の部署に戻ってきたとき、仕事の方向が以前と随分変わっていることに驚きました。人口減少・超高齢社会に対応したまちづくり、低炭素社会の実現に向けた土地利用等、8年前の実務の中では出てこなかった言葉でした。

「これはマズイ！ もう一度勉強し直さないと、25年の役人生活で錆びついた頭では太刀打ちできないぞ！」と思った矢先に目に入ったのが、「まちづくり大学院」のリーフレットでした。

仕事を続けながら週の半分以上授業に出るのは、かなりキツイと躊躇しましたが、残り10年の役人生活をこのまま惰性で送るより、何かにチャレンジしたら新たな発見や人生の転機があるかもしれないと思い、受験を決断しました。

■ 小林洋平——大成建設(株)

私は建設会社において都市開発本部に所属し、東京都心の再開発案件を担当しています。今後は東京だけでなく地方都市への展開の必要性も議論しています。また、都市そのものも刻々と変化をし、多様化しています。「これは何なんだ？ どう捉えたらいいのか？」と、普段の仕事の中では疑問の連続です。

私は、まちづくり大学院での学びを通じて、今一度、都市及びそのまちづくりを俯瞰し、自分なりの地図を持ちたいと思っています。そして、今後の仕事におけるプランニングに生かしたいと思っています。

個人的には、地方都市の中心市街地に興味があります。コンパクトシティ、商店街をキーワードとした、バランスのよい心地よいスケールのまちづくりの仕事に携われればと思っています。

■ T.O. —— JICA

本大学院に期待するところはいろいろあるけれど、とりあえず当初の3つの期待、①「まちづくり」を切り口に、現時点の最先端の情報を幅広くインプットしたい、②先生やクラスメートとのネットワークを深めたい、③現役学生のときには触れなかったGIS等の新しい技術を身につけたい、は期待以上に達成されそうだ。

明確な問題意識をもったクラスメートが与えてくれる刺激。このコースを大切に育てていこうという、随所で感じられる先生方のお気持ち。いつでも、どんなことでも質問できるという喜び。この大学院が提供してくれるものに比べれば、火水木曜の5分間夕食のさびしさ、土曜午後いっぱい演習のしんどさなどはとるに足らない。

まちづくり大学院第一期生という栄誉？を胸に、学生としてコースの価値向上に貢献したいと思う。

■ 阪井暖子——まちづくり・まちあそびプランナー

沖縄から上京し、その足で開講式に向かったあの10月2日から早1ヶ月半。開講式後すぐに始まった講義は、各分野での一人者の教授陣による毎日がシンポジウムといった内容。毎晩、帰るころには知恵熱発熱。知れば知るほどもっと学びたくなります。こんな環境で勉強ができるのがとても幸せです。

また19名のクラスメートも、多士済々。講演会が開けるような人ばかり。現場で連日闘っていらっしゃる中からでてくる質問はで、先生のお話が更に深まり広がります。大西先生、大方先生はじめこの素晴らしいコースを創設してくださった先生方、毎日夜遅くも土曜もきめ細かにサポートしてくださる松行先生、事務局の荒井さん等と、19名のクラスメートが「協働」して、この新しいコースをより面白いものにしていけたらと思っています。このまちづくり大学院が、新しいまちづくりの知のネットワークの核となって知的爆発が起これたらと、密かに期待を深めている毎日です。

まちづくり大学院に入学して——2

■高橋正樹——UR都市再生機構

仕事では、「景観」をキーワードにしながら、まち全体の目標像である「デザインガイドライン」を策定し、それをもとに、様々な方々と設計調整・景観形成を行っています。

まちづくり大学院では、授業も様々な分野からの最先端の情報の講義を受けることができますし、社会人である学生もその分野ではプロフェッショナルの方々ばかりなので、実習を通じて、多様な分野の人たちとディスカッションを重ねる楽しさがあります。そういったことを通じて、まちに対して、総合的・幅広い視点を持つことの重要さに気づかされます。

今後、まちづくりを行う上で、幅広い視点（景観、防災、環境配慮、ユニバーサルデザイン、少子高齢・子育て、協働のまちづくり）と時間軸を考慮しながら、地域らしさを活かしたまちづくりを行っていきたいと考えています。

■N.T——金融

実家の店を良くしたい、自然の多いところに住みたいし、きれいな街並みの方がいい、親のケアは今後どうしようか、という全く個人的な悩みを解決するために、受験したまちづくり大学院ですが、入ってみて思ったのは、受験前に皆さんの職歴を知らなくて良かったな（笑）という一方で、思った通り、刺激が受けられそうな環境で良かったということです。更に、「自分の子どももそういう環境で育てたい」と志望理由書に書いているときに、第一子ができたことが分かり、ますます真面目にやる理由が増えてしまいました。授業はどれも面白いですが、何が議論されるのか？ ということと同時に、何が議論されないのか？ ということにも着目してみると、何か新たな事業のヒントが見えてくるかなと思ったりもしています。ちなみに、自分が育った環境は、学校から家に帰ると店先にお客さんがいて、家族で食事もお客さんが来れば、親はすぐ店に出ていくというような商店でした。そういう原体験を頭の片隅に置きつつ、新しい知識をガンガン吸収したいと思っています。



■ GIS 演習

■樋口智幸——日経アーキテクチュア編集部

専門誌の記者はつらい。読者の皆様がその道の専門家だ。日々、実務の最前線で奮闘している方々の、経験の積み重ねから得られた知識と知恵にかなうはずもない。それでも締め切りはやってくる。しかも半月に一回。

専門誌の記者は楽しい。そんな現場の方々に、名刺一枚で時間をいただき、貴重な話を伺うことができる。その度に、世の中には自分が知らないことがまだまだあるのだ、ということを感じ取る。

景観やまちづくりを追いかけようになって3年。まとまって学ぶ機会があれば学びたいという思いが募っていたところに、開講の情報を得てパクリと食いついた。縁あってなんとか潜り込んでみれば、クラスメイトはバリバリの実務者ばかり。

記者と取材先という関係では到達できない、共に学ぶ仲間と一緒に、大切な毎日を過ごしている。

■細野良子——(株)コーエイ総合研究所

途上国における経済開発、産業開発、地域開発に関する調査、プロジェクト管理を行うコンサルティング業務に従事している。仕事をしていく中で常に大きな課題であったのが、①貧困、主要産業の停滞、行政の能力不足など複数の困難に直面する地域の活性化手法と地域経営の在り方、②時には開発の足枷と捉えられかねない環境保全と経済開発の両立の仕方——である。まちづくり大学院で学ぶ日本や諸外国の都市経営、まちづくり手法や都市環境管理などの分野における基本事項や様々なケースは、この問題を解くための「鍵の束」になると考えている。また、まちづくりに関わる様々な分野で活躍される先生方、クラスメイトの方々と構築するネットワークは大学院修了後も是非机の傍らに持ち続けたい「生きた参考書」になりうると期待している。

■松本昭——国分寺市役所

新しい出会い、新しい仲間、新しい刺激……。年齢不相応の学生証を持つ愉快さを心に秘めて、荘厳さがぐっと迫る本郷で学ぶことになりました。

「まちづくり」とは、およそ都市工学や都市計画、建築、土木の他、社会学など人文科学の領域も包み込む広範で奥深い学際領域であり、社会の先端でご活躍の講師陣の講義は、示唆に富んで興味が尽きません。

昼間は、自治体でまちづくりの最前線に関わり、夜は、努めて客観的に都市の有り様を考えるという「二束のわらじ」を少しでも楽しく履くため、長期履修制度を活用し、ときどきは休息することも必要と考えています。そして何よりも、多くの先生方や若い大学院生とも交流し親睦を深め、私の研究テーマである「分権型土地利用の本質」にささやかにチャレンジしたいと考えています。



■ 演習でのまちあるき

■ 松本博之——NPO 法人 深谷にぎわい工房

私は埼玉県北部、深谷市で中心市街地の活性化を目指したまちづくりNPO法人の理事長をしています。MISSIONの意味もろくに理解せず、FASHIONに乗り、PASSIONだけで立ち上げたNPO法人で、活動は試行錯誤の連続です。

まちづくりについて勉強のきっかけは、2001年に東大の先端研で主催した「第1回先端まちづくり学校」に参加したこと。活動の中で自分なりに理論的なバックボーンが欲しいと考え、その後のまちづくり学校にも参加し、その都度の受講後のアンケートに「社会人向けのまちづくり大学院の設立希望」を記入しておりました。そして今般「東大まちづくり大学院」設立の報に接し、何を思い受験したしだいです。これから“3年間”、まちづくり大学院で学んだことを少しでも深谷市でのNPO活動に実践していきたいと思えます。

■ K.M —— 地方自治体

まちづくりを取り巻く社会情勢は複雑化し、まちづくり行政に関わる分野や関係者も多様化している。その一方で、日々の業務はノルマに追われ、地元説明会や議会質疑を通じて同う要望や課題等について、その裏側にある本質的な部分にまで考えが及ばない。私は、まちづくり大学院において、これまで実務を通じて習得した経験を改めて見つめなおし、学術的な意味や理解の不足する分野の理論等について理解を深めたい。その結果、これからのまちづくり行政の推進においては、場当たりの対応ではなく、体系の中での位置づけを踏まえ、将来を見据えた持続可能な政策を立案し施策を展開していく。

■ 森正史——(株)アバンアソシエツ

大学院開始よりあつという間に一ヶ月が過ぎ去ってゆく。学生+社会人という「2足の草鞋」(いや、育児もあるので「3足」)生活も、ようやくペースが掴めてきた。建築設計畑で主たるキャリアを積んできた者にとって、まちづくりの第一線で活躍されている講師陣による新鮮な講義に日々接することは、視野が広がると共に、これまでの実務経験で体得した知識を体系化し、整理できるよい機会ともなっている。また、まちづくり演習での共同作業等を通じ、実務経験豊かな他の社会人学生と親交を深められる機会も有意義であると共に、先生方も参加される宴の時間が楽しく活気に溢れていることは言うまでもない。皆様仕事もあり困難なこともあるだろうが、まちの課題解決に資するNPO等組織を学生有志で立ち上げ、運営する試みに繋げてゆくことも目指したい。

■ 横田大輔——三菱地所(株)

「容積率ボーナスを対価として都市への貢献を促す都市再生政策は万全ではない。」デベロッパーにおいて都心大規模開発に携わる中、そんな問題意識から本大学院に興味を持ちました。人口減少・高齢社会、温暖化対策、地方の再生等々、今後対処せねばならない環境の変化に対し、解とはなり得ない容積率ボーナス。それに代わる都市開発はどうあるべきか。次世代に向けた課題を考えるにあたって、様々な分野の最新動向を幅広く勉強し、都市開発に対する自らのポリシーを持ちたい、また、それを実現する手法を学びたい、そう思い志望しました。入学してみると、同級生は経験の豊富なまちづくりのプロばかり。最年少で経験の浅い私ですが、臆することなく、刺激しあい業種を超えてコラボレーションしたりと、授業以外でも今後の大学院生活の展開を楽しみにしています。

■ 尹哉皓——韓国土地公社

韓国土地公社の代表的な不動産開発業務の一つは、宅地開発を含んだ新都市開発事業です。この事業は、都市地域内の深刻な住宅難を解消するための事業で、住民の権利よりも迅速な事業推進を優先して来た面がありました。韓国で民主化、地方分権化が定着すると、このような全面買収による新しい宅地開発、新都市開発事業は、住民やNGOなどと深刻な確執をもたらすようになりました。公社でもこのような事業方式を変えていこうと努力しており、その一環として私は東大まちづくり大学院に入学しました。

日本のまちづくりは地域住民が主体になって周辺環境を一つひとつ改善して行く住民参加型開発方式と考えられます。古いものを完全に壊して、新しいものを作る韓国の従来の不動産開発方式に、このようなまちづくり方式を導入して、住民の自発的な支持が得られる、環境破壊の少ない開発方法を樹立して、事業地区に適用して行きたいと思えます。

カリキュラム紹介

主な講義

●まちづくりプロジェクト演習(必修・全9単位)

美しい街並みづくり、少子高齢化時代のまちづくり、持続可能な環境都市づくり、協働のまちづくりの4つの主要課題を対象に、都市再生の第一線で活躍する専門家(非常勤講師を含む)による実践的指導のもと、政策・手法・戦略・事業の企画構想・提案を行います。演習では、ケースメソッド方式の講義を踏まえつつ構想・提案を行います。

●都市空間政策(選択・各2単位)

都市の空間計画、交通政策、環境政策、安全・安心、都市福祉政策、都市のガバナンスといった広範な領域について、充実した講師陣による最先端の講義によって、現代の都市づくり・まちづくりに必要な知識を獲得します。

●都市経営基礎(選択・各2単位)

都市の空間と文化、都市社会論、都市行財政論といった講義群により、都市づくり・まちづくりに必要とされる社会科学系の基礎知識を体系的に獲得します。

●都市経営戦略(選択・各2単位)

都市と住宅・不動産開発、都市の産業と経営戦略、都市の文化・観光政策といった講義群により、都市経営や都市政策の立案に必要な実践的な知識を獲得します。

●特別講義(選択)

省庁担当官等による都市関係制度・事業・自治体による先駆的試み、最新の都市開発事例、海外の著名研究者による講義、海外都市計画大学院との相互交流演習等を予定しています。

●都市持続再生学特別演習(修士研究)(必修・全4単位)

学生の実務・関心に直結した研究を2年次より行います。

※講義科目名称・内容はいずれも予定です。

修了に必要な要件・学位

所定の30単位を修得し修士論文を提出すること。
学位:修士(工学)

時間割

2007年度(1年)冬学期 (2007年10月~2008年 1月)

時限	火	水	木	土
3				演習 - 都市の実体分析と空間構造基礎(小泉, 貞広) - 少子高齢化・人口減少時代の都市再生(城所)
4				
5				
6	都市空間政策 - 都市空間計画概論(大方)	都市経営基礎 - 都市開発のマネジメント(大西)	都市空間政策 - 都市情報の分析(貞広, 羽藤)	
7	都市空間政策 - 都市と環境(花木) - 安全安心のまちづくり(小出, 関沢)	都市経営基礎 - 都市計画・まちづくりの制度(明石)	都市空間政策 - 都市の交通政策(原田)	

2008年度(1年)夏学期 (2008年 4月~2008年 7月)

時限	火	水	木	土
3				演習 - 美しい景観と街並み(西村) - 協働のまちづくり(小泉)
4				
5				
6	都市空間政策 - 都市情報の分析(貞広, 羽藤)	都市経営戦略 - 都市産業論(城所)	都市空間政策 - 環境のデザイン(石川)	
7	都市空間政策 - 都市と福祉政策 - 都市と環境(花木)	都市経営基礎 - 都市住宅不動産開発(遠藤)	都市空間政策 - 都市空間計画概論(大方)	

2008年度(2年)冬学期 (2008年10月~2009年 1月)

時限	火	水	木	土
3				演習 - 持続可能な都市(大方) - 個人選択課題
4				
5				
6		都市経営戦略 - 都市の文化政策・観光論(西村)	都市空間政策 - 都市建築のデザイン	
7		都市経営基礎 - 都市社会論(小泉)		

2009年度(2年)夏学期は、都市持続再生学特別演習(修士研究):指導教官との個別演習

■タイムテーブル

3時限(13:00-14:40) 4時限(14:45-16:25) 5時限(16:30-18:10) 6時限(18:30-19:50) 7時限(19:55-21:15)

都市持続再生学寄付講座が発足

東大まちづくり大学院の開講に合わせて、本年10月1日から5年間の予定で、都市持続再生学寄付講座(Laboratory for Urban Sustainable and Renaissance Studies)が発足した。この寄付講座は、下記の14社からの寄付によって工学系研究科に設置されたものである。寄付企業の皆さんにお礼申し上げる。寄付講座に属する教員は大西隆(教授・先端科学技術研究センター・併任)、多田宏行(教授・前三井不動産S & E総合研究所長・非常勤)、松行美帆子(准教授・専任)となっている。研究分野は、1)都市及び都市開発のマネジメントに関する研究、2)都市計画分野の分権・民活論、3)持続可能な都市のあり方論としており、

研究成果を論文、研究報告の形で出版したり、HPで公表するほか、内外の民間実務者を講師に招いた講演会やシンポジウムを企画している。また、東大まちづくり大学院の教育・研究にも積極的に関わり、共同でニュースレターを発行する(第1号が本紙)。とくに、講演会やシンポジウムは一般にも公開して行うことを予定している。

寄付企業は住友不動産(株)、東京建物(株)、三菱地所(株)、三井不動産(株)、森ビル(株)、(株)大林組、鹿島建設(株)、清水建設(株)、大成建設(株)、(株)竹中工務店、東日本旅客鉄道(株)、東京電力(株)、東京ガス(株)、積水ハウス(株)の各社である。